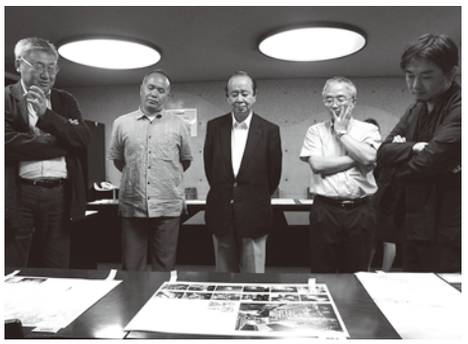
審査講評



審査委員長　安田 幸一

空間デザイン・コンペティションがはじまってから20年目という記念すべき機会であったため、是非ガラスの本質を問いかけるような直球勝負の課題を出してみたいと思った。「ガラスは見えるか 見えないか」という問いかけは、ともすれば難解であったにも関わらず、意欲的でユニークなアイデアが予想を超えて数多く提出された。提案の中では、海や湖などの水面直下に見えたり見えなくなったりする透明なガラス床を提案したもの、自然景観や街並の中で必要ではあるが、視覚的には無いほうが良い都市インフラ（例えば、電柱、テトラポット、防波堤）をガラスという透明な素材に置換したもの、森の風景を切り取るようにガラスの透明と反射を使い分ける案など、いくつかの傾向も見られた。その中で最優秀賞の林拓真君らの案は、ガラスの光学的特質を見事に捉え、板ガラスの表面側はその存在を消し去り、エッジの小口部分は逆に光を反射し主張するという、ガラスの本質を率直に受け止めた上で新鮮な表現となっており、審査員全員が案の「静かなる存在感」に魅了された。優秀賞の片山豪君らの案は、廃墟になった工場を取り上げ、朽ちた構造部材や抜け落ちた床板をガラス素材で修復して、時間が止まったような美しい風景を創り上げることに成功している。作品例部門では、単に製品を使用するのではなく、そこに材料の「新しい解釈」が必要になってくる。最優秀賞の『旧桜宮公会堂』は、歴史的建造物に挿入されたガラスブロックの箱であるが、床壁天井全てをガラスブロックで覆ったその勇気と徹底感が高く評価された。こちらもまさに直球勝負の作品である。優秀賞の『宮本商行 銀座本店』は、「見えないガラス」を商品ケースのみならず、ファサード全体を積極的に使用している。本来ガラスが重なるところは緑の色が濃くなり、かつ反射があるため、空間の透明感が損なわれるのが、ここでは全く透明でまさに透き通るような空間構成が見事に表現されている。作品部門でも真っ直ぐにガラスに向き合っていて気持ちの良い作品が入選したと感じた。直球勝負は見事に打ち返された。

審査委員　山下 保博

今回の審査を行なう上で、私の評価の視点は東日本大震災以降の次なる提案を出せているかに重点を置いた。これから大事だと思われるインフラや環境型の提案であること、今までに見たこともない新しい建築の枠組みの提案であることに注目した。提案部門の最優秀賞の『Nature in the Furniture』は今回のテーマの「見える、見えない」をうまく読み取り、美しく仕上げる力を持っているゆえに、次なる新たな視点が望ましい。優秀案の『時を彩る無色』は今回の中でも特異であり、秀逸な作品である。見えないガラスにより失われた素材や時間への置き換えのアイデアは凄く興味が沸いた。敢えて言うならば、ビジュアルを少なめにし、詳細なディテールを盛り込む方がより分り易かったと思う。今回、インフラの整備案が数多く出た中で、『静寂の標べ』は、とにかくアイデアもシンプルで美しかった。現実化できるような詳細があればより共感を覚えたと思う。『水を貯める透明な綿毛』は壮大で美しい。ビジュアルのうまさ、詳細まで思考しているダイアグラムや図面を見るにつけ、これからの時代に有望な人だと思った。『水粒のマドレーヌ』は私的に見えるが、建築の可能性の枠を広げる案としては大変興味深かった。作品部門に関しては、『旧桜宮公会堂』は誰もが夢見るような提案をちゃんと現実化し、美しく纏め上げたことは最優秀案に相応しく、是非訪れてみたい。『M邸』は構造として使用していることは興味深かった。出来るならば、もっと広い空間の中での使用例を見てみたい。『hair & make sofa 仙台駅前店』は小さな作品ではあるが、小口の処理とスケールがマッチしており、設計者の手腕が伺える。優秀案の『宮本商行 銀座本店』は見えないガラスを使用した作品としても評価の価値があること、デザインはクラシックながらもクライアントから求められた高級感とディスプレイがうまく融合していることが評価に値する。最後に、提案側ではなく審査する側としてガラスブロック等の素材の提案を見る機会を頂いたことに感謝したい。また、日本電気硝子のガラスブロック以外の素材がもつ新しい可能性を見てみたいと思った。

審査委員　平田 晃久

このコンペの面白さは、現実の素材との関係を、アイデアコンペという枠組みの中で思考しなければならないところにある。想像力を現実のマテリアリティーの中からひきだし、ドライブさせることができるか、が問われている。「ガラスは見えるか見えないか」という難しい課題に対してたくさんの案が寄せられたのは、そういう、このコンペならではの面白さにひきつけられた人が多かったのだと思う。審査する側としては単純にうれしく、楽しませてもらった。最優秀賞に輝いた林拓真、土屋秀正、佐々木嶺案は、「見えないガラス」という素材の持つ特性を的確に把握して、解像度の高いイメージを提示している。多くの案はこの素材のネーミングにあまりにイノセントに反応して、単純にこのガラスが「見えない」ことを前提にしてしまっていた。この案が優れているのは、「見えないガラス」といえども小口は見えてしまうということを逆手にとって、線画のような美しい世界をつくり出していたところだ。ありそうでいて、普通のガラスやアクリルを用いたのとは違った見たことのない世界が想像できる。優秀賞の片山豪、高松達弥、丹下幸太、細川良太案は近代の遺産建築をガラスで補っていくユニークな提案である。朽ちていく建物とガラスの対比が美しく、細部まで緻密に考えられていた。入選作品の中では、根本雅章案に好感を持った。古いような新しいような魅力があったが、レトロな感じでなくもっと直截な表現にしたら、さらに強い印象を持ったかもしれない。作品例部門では、最優秀賞に輝いた森田昌宏、野口伸、足立裕己案が魅力的だった。徹底してガラスブロックを用いた、自然光に満たされた空間は強烈である。ぜひ実物を体験してみたい。

審査委員　大下 純夫

空間デザイン・コンペティションは、おかげさまで記念すべき第20回を迎えることができました。関係者各位、ならびに応募者の皆様方に深く感謝申し上げます。

【提案部門】最優秀賞の『Nature in the Furniture』は、見えないガラスで建築、家具を構成し、小口を輪郭として微かに見せることで、その存在を必要最小限に感じさせる。見えないガラスの特性をよく研究した提案でした。製造側から見れば「見える小口は見えないガラスの弱点」と捉えていましたが、逆に輪郭として見せるという発想に深く感心させられました。優秀賞の『時を彩る無色』は、朽ちゆく建造物の朽ちた部分をガラスで補強し、朽ちたままの姿で近代化産業遺産として保存していくといった興味深い提案でした。ガラスの半永久性、無色といった特長を補強建材として活かす。ガラス建材の新しい可能性を感じました。

【作品例部門】最優秀賞の『旧桜宮公会堂』は、床、壁、天井全てをガラスブロックで構成した作品。刻々と移り行く自然光の変化を中に居て感じることができる、結婚式場に相応しい、明るい未来を想わせる空間でありました。かつて体験したことが無い心地好い空間の構成材料として、ガラスブロックを選定いただいたことを深く感謝いたします。優秀賞の『宮本商行 銀座本店』は、ファサードにも見えないガラスが採用された作品。見えないガラスの特長が最大限活かされており、この作品がお手本となり店舗建築での採用が広がっていくことを期待したいと思います。これらの作品以外にも弊社建材製品の特長を旨く活かしていただいた作品が数多くありました。今後もこの空間デザイン・コンペティションを通じて、効果的で新しい使い方が数多く提案されることを期待したいと思います。